

ハイデガーとニヒリズムの問題¹

有馬 善一

[要約]

ハイデガー哲学において、ニヒリズムは極めて大きな問題であるとともに、その問題性は多面的な様相を示している。それを明らかにするために、本論文は、①ハイデガーのニーチェ哲学との対決とその解釈において現れるニヒリズムの問題、②ハイデガーの存在史的思想の中で現れるニヒリズムの問題の2つを課題として取り上げる。また、①の問題と関連して、③ニーチェのニヒリズムとはいかなるものであったのか、も明らかにされなければならない。

本論文における分析・考察の結果は次の通りである。①ニーチェ思想におけるニヒリズムがパースペクティヴィズムとの連関において肯定的性格を示していること、②ハイデガーの存在史的な解釈において、ニーチェのニヒリズムのこの性格が正当に評価されていないこと、③ハイデガーにおいては、ニヒリズムの現象は、形而上学の歴史の全体において〈存在〉が逃れてしまうということとして捉えられており、形而上学の本質そのものがニヒリズムであると考えられていること、④ハイデガーによれば、ニヒリズムの今日的な現象は科学技術の世界支配であり、ハイデガーはニヒリズムを耐え抜くことの必要性を説くが、反面、技術支配の〈危険〉についてのハイデガーの認識には少なからぬ問題があるということ、以上4つの点が明らかとなった。

はじめに

「ニヒリズム」について語ることには、今日どれほどの意義が認められるであろうか。これをある種の主義主張と理解するならば、ニヒリズムがかつて持っていたインパクトや暗い魅力はもはや失われているとも言えよう。しかし、ニーチェが言うように、これをある時代や文化の「最も不気味な症候」(das unheimlichste Symptom)²と捉えるならば、また、それが「通常の(normal)状態」³であると言えるのならば、ニヒリズムという言葉が表立って使われなくなったということが、かえってニヒリズムという時代の〈病〉の深刻化を示唆しているとも言えよう。つまり、ニヒリズムに冒された時代状況の危険性がそれとして意識されることなく、当たり前のものでそれに慣れてしまうということ自体が、ニヒリズムの深刻化を示す徴候なのである。この意味では、「次の二世紀の歴史」を「もはや別の仕方では、やって来ることのできないもの、すなわちニヒリズムの到来」として書き記すのだ、と述べたニーチェの預言は的中したと言えよう⁴。

とはいえ、ここにすでに現れているように、ニヒリズムという概念はどこか曖昧な点があり、また、多義的な性格を持っている。

ニヒリズムは、無神論的傾向を持つ思想に対する「罵り言葉」(Schimpfwort)、ないしは、レッテル貼りとして使われたのが始まりと言われている。フィヒテのケースがよく知られているが、哲学的反省は、程度の差はあれ、純真な信仰への懐疑という側面を持たざるを得ないとすれば、あらゆる哲学がこの非難を受ける可能性があった⁵。また、ツルゲーネフの『父と子』やドストエフスキーの『地下室の手記』の中に描かれた18世紀後半の帝政ロシア時代の「ニヒリスト」のように、ある時代の思想的な傾向を、揶揄する、ないしは、批判的に形容する言葉として、ニヒリズムという言葉は用いられた⁶。

しかし、ニヒリズムという言葉には、このような拒絶的なレッテルには留まらない意味がある。すなわち、歴史的な潮流・傾向に対するレッテルと言うよりは、歴史的な潮流・傾向の〈根底〉にあるものに対して、ニヒリズムという概念が適用される場合である。ニーチェが与えた「最高の諸価値が無価値になってしまうということ」⁷という有名な定義は、まさにこれであり、ニヒリズムという概念は、ニーチェによって思想史上初めて実質的な内容を与えられたと言ってもよい。

もちろん、問題は単にニヒリズムをどう捉えるかというだけにとどまらない。ここで気をつけるべきは、ニーチェがニヒリズムを、時代全体を必然的に規定するある動向として捉えているということである。それゆえ、ニヒリズムがどうして必然となるのかが大きな問題となるのであり、ニーチェは「系譜学」(Genealogie)という方法に

よってこれを明らかにしようとした。

ハイデガーにおいても同様の事情が見て取れる。しかし、ハイデガーが問題にするのは、系譜ではなく、ニヒリズムの〈本質〉であったということは両者を分かつ重要な違いとなるであろう。

さらに、ハイデガーとニーチェの方向性の違いは、ニヒリズムのニヒル(nihil)つまり、〈無〉に対していかなる姿勢をとるかという点に現れる。ニーチェにとっての無とは、端的に言えば、無価値・無意味のことであり、どこまでも〈生〉との相関関係において無が問題になる。それゆえ、ニヒリズムもまずは克服すべき対象として現れる。これに対して、ハイデガーでは、無はそれ自体として問題になる。あるいは、〈存在〉との関わりにおいて問われる。一例を挙げるならば、『形而上学とは何か』の中で、ハイデガーが「どうしてもそもそも存在者が存在して、むしろ何も無いのではないのか」というライブニッツの問いを取り上げ、不安という根本気分の中で、存在者全体の無化(Vernichtung)が生起することで、初めて世界(=存在)への問いが目覚めるという逆説的な事態を取り出していることは、まさにその典型である。ハイデガーは、「存在者とは別のものとしての無は、存在のヴェール(Schleier)である」⁸と述べている。無は一方では、存在への我々の眼差しを遮るものであると同時に、他方では、存在を見透かすことを許すものでもあるという両義性において捉えられなければならない。それを仮に、「存在と無の相即不離」と呼ぶならば、ハイデガーの存在の思惟の全体は、この事態をライトモチーフとしていると言っても過言ではない⁹。

それゆえに、ハイデガーにおいても、ニヒリズムは確かにある時代を特徴づける根本動向ではあるが、それがただちに克服できる、ないし、克服すべきものとはならないのである。

こうして、本稿の目標とすべき事柄は次のようなものとなる。つまり、第一の課題として、時代の動向の根底にあるニヒリズムをどう捉えるべきか、特にニーチェの思想とのハイデガーの対決はいかなるものであったのかを明らかにした上で、ハイデガー自身の西洋形而上学の歴史把握において、ニーチェとニヒリズムの思想がどのような位置を占めるのかを解明することである。さらに、ここからニヒリズムと近代技術の世界支配との連関が現れてくる。この問題の究明が本稿の第二の課題となる。

1. ニーチェにおけるニヒリズムとハイデガー

1.1 ニーチェにおけるニヒリズム

ここではニーチェにおいてニヒリズムとはいかなるものであったのかについて、そ

の基本線を示しておく。

上に述べたように、ニーチェはニヒリズムを「最高の諸価値が無価値になること」と規定するのであるが、そもそも価値とは何であろうか。「価値」とは、生がそれを目指し、そのために生き、それを根拠に存在する〈意味〉であるが、ニーチェはこれをまた「観点」(Gesichtspunkt)とも言い換えている¹⁰。その背景には、価値は生と世界との相関関係のうちのみ成立するのであり、それ自体として存在するのではないというニーチェの相対主義的な思想がある。つまり、価値は生きようとする欲求にとっての〈目標〉なのであり、また、価値によって生が維持・昂揚する度合いが価値の大きさを表すことになる。

また、価値は真理の認識においても尺度となる。「価値評価こそが「真理」の本質」なのであり、「真なる世界と仮象の世界の対立も価値関係に還元される」のであり、真なる世界が存在するというのも、それ自体価値定立によって可能になるのである¹¹。

こうして、ニーチェにおいては、あらゆる価値判断、真理の認識は、価値を定立するもの、認識をするものから見た視点、あるいはパースペクティブ(Perspektive)に制約された解釈となるのである。

ニーチェは『悦ばしき知恵』において、次のように問いかける。

生存の遠近法的性格は、どこまで及んでいるのか、あるいはまた、生存にはまだ外に何らかの性格を持っているのだろうか、解釈なき生存、「意味」(Sinn)のなき生存とはまさにナンセンス(Unsinn)とはならないだろうか、他方から言えば、一切の生存は本質的に解釈する存在ではないだろうか¹²。

しかし、この問いに対する十分な解答は存在しない。なぜなら、知性のいかなる誠実な自己吟味であっても、それは再び遠近法的な解釈にならざるを得ないからである。こうして、「世界は無限の解釈を包含するという可能性」¹³を持つことになる。真なる世界は存在せず、無数に解釈された世界のみが存在するという相対主義の徹底化をニーチェは「パースペクティヴィズム」(Perspektivismus)と呼ぶ¹⁴。

次に、いかなる機序によって、ニヒリズム、つまり、最高の価値が無価値となってしまうのかが明らかにされなければならないが、これについては、「ヨーロッパのニヒリズム」というタイトルを持つ「レンツァーハイデ草稿」¹⁵と呼ばれる遺稿——これは¹⁶のパラグラフから構成されている比較的長い草稿である——を検討することが有益であろう。

以下、この草稿でのニーチェの議論の道筋を再構成してみよう。

人間はちっぽけで偶然な存在に過ぎず、この世界は苦しみや災厄に溢れている（この事態をニーチェはここでは「実践的および理論的なニヒリズム」、「最初のニヒリズム」と呼んでいる）。しかし、これに対して（対抗して）「キリスト教道徳」は、この世界は完璧であること、絶対的な神と神の摂理が存すること、また、人間の存在にも絶対的価値を認め、さらに、価値を十分に認識できるものとした。これらは全て「仮説」であったが、道徳はこの点で人間の「自己保存の手段」、また、最初のニヒリズムに対する「対抗手段・特效薬」（Gegenmittel）として働きを持っていた。

しかし、道徳はまた「誠実さ」をも涵養する。それによって、人間はこの道徳のうちに「目的論」が潜んでいることを見抜き、欺瞞をかぎつけてしまう。こうして、誠実さは「ニヒリズムの刺激剤(Stimulans)」として作用し、その結果、人間は仮説としての道徳ないし「道徳—解釈」(Moral-Interpretation)が「非真理への欲求」であることを認識するが、それを肯定的に評価することもできず、さりとて、道徳の与えた仮説をもはや信じることもできないというジレンマに陥る。

その結果、人間は極端から極端へと駆り立てられる。つまり、「自然の絶対的な非道徳性、無目的性と無意味性への信仰」が「必然的な情動」となるのである。それが「現在のニヒリズム」であるが、それはキリスト教道徳の解釈を崩壊させるような「全ては無駄だった」という性格を持つ。

ところで、道徳を無効にするニヒリズムは、社会的に被支配層に位置する人びとに対して、より破壊的な効力を発揮する。つまり、これまで道徳は暴力を保持する「支配者」を敵として、彼らの「力への意志」を侮蔑することを教えてきた¹⁶のであるが、「普通の卑しい人びと」、ないしは、「生理学的」な意味で“出来の悪い” („schlechtweggekommen“)人びとは、ニヒリズムによって侮蔑の正統性を失うことになる。その結果、彼らはある程度の〈力〉をもっているのならば、「やがては自分が破壊されるために破壊を行う」ことになる¹⁷。このような自暴自棄に陥った「無への意志」をニーチェは「能動的ニヒリズム」と呼ぶ。

しかし、無への意志はいまだ立場としては不徹底である。ニヒリズムの思想を最も極端、最も恐るべき形態において考えるならば、次のようになる。つまり、「生存(Dasein)がそのあるがままにおいて意味も目的も持たず、しかも、無において終局を迎えることもなしに、不可避的に繰り返される」という思想、つまり、「永遠回帰」である。この思想を受け入れることができると思われるのは、“出来の悪い”人びとではなく、「最も強い人びと」、「極端な信仰箇条を必要とせず、相当量の偶然、無意味を容認するのみならず、これを愛する」人びと、つまり、「最も中庸な人びと」である。彼らはまた「最も豊かな健康に恵まれている」人びとでもある。それはツァラ

トウストラにおける「超人」に繋がるものであろう。そして、ニーチェはこの草稿を「こうした人間は永遠回帰についてどう考えるであろうか」という疑問文で閉じている。

このように、ニヒリズムの発生は、キリスト教道德の与える世界観の欺瞞が明らかになった時に極端から極端へと走ったことがその原因であるとニーチェはこの草稿の中で説明する。その際、一つ注意をすべきであることは、ニーチェにとって、キリスト教道德はあくまでも一つの解釈にすぎないということである。確かに、ニヒリズム、特に「能動的ニヒリズム」に走る人びとは、それが唯一の解釈であると誤解している。しかし、パースペクティヴィズムに立つニーチェからすれば、解釈の可能性は無限にあるということになるのである¹⁸。

また、これと関連して、ニーチェにおけるニヒリズムが多面的な性格を持っていることも重要である。次に、この点を明確に示しているもう一つの有名な遺稿を取り上げる。

それは「はじめに」で言及した 1887 年秋に書かれた遺稿である¹⁹。そこでニーチェはニヒリズムの両義性を指摘した上で、「能動的ニヒリズム」と「受動的ニヒリズム」に区分する。能動的ニヒリズムは「強さの徴候」ともなりうる。つまり、「精神の力が増大し、その結果従来の諸目標がこの力と釣り合いがとれなくなってしまうことがありうる」。しかし、このニヒリズムは「おのれのためにもう一つの目標を立てるほどには十分な強さを持っていないことの徴候」でもありうる。それゆえ、これが「極大」になるのは「暴力的な破壊の力」としてである。

受動的ニヒリズムは「弱さの徴候」である。つまり、「精神の力が疲労困憊し、その結果従来の諸目標や諸価値に適合せず、それらが信仰されなくなるということがありうる」。デカダンスやペシミズムがこれに該当する。「宗教的・道徳的・美学的などのさまざまな仮装」のもとで人を慰めるが、それは諸価値が統合を失って、バラバラとなっていることの現れに過ぎない。

いずれの場合でも、ニヒリズムは「病理的な中間状態」とニーチェは見なしている。さらに、これに続く次の節の表題が示すように、ここには一つ前提が存在するとニーチェは考えている。つまり、「真理は存在しないということ、事物の絶対的な性質、“物自体”などは存在しないこと」という前提であり、このこと自体が「一つのニヒリズムであり、それも最も極端なニヒリズム」とであるとニーチェは言う。このニヒリズムの立場からすれば、「実在性とは価値定立者の側の力の徴候にすぎない、生の目的のための単純化に過ぎない」ということになる。

ここにおいてニヒリズムは「力への意志」と密接な関わりを持つに至る。先に考察

したレーツェンハイデ草稿においては、「永遠回帰」とニヒリズムの連関が述べられていた。これら二つを合わせるならば、ニヒリズムの極端な形態を媒介として、力への意志と永遠回帰が結びつけられるのであり、ここにおいてニヒリズムは一つの解釈として新しい価値の定立へとつながるものと考えられるのである。

ニーチェが自らについて、「ヨーロッパの最初の完全なニヒリスト」、つまり、「ニヒリズム自体をすでに自分のなかで終わりまで体験しており、それを自分の背後に、自分の下に、自分の外に持っている」²⁰と語るのは、この3つ目の意味におけるニヒリズムを我が物としたということであろう。

1.2 ハイデガーのニーチェのニヒリズム解釈

では、ハイデガーはニーチェのニヒリズムに対してどのように応じているであろうか。

ハイデガーはナチスとの関わりが取りざたされる1930年代にニーチェ哲学と取り組み始めたと言われている。『ニーチェ』全2巻は、フライブルク大学で講じられた10の講義からなる大部なものであるが、最初の第1講「芸術としての力への意志」は1936/37年の冬学期、多少順番が前後して第7講「ニヒリズムの存在史的規定」は1944/46年に行われた講義を収録している。つまり、足かけ10年にもわたっているわけであるが、この時期にまたハイデガー自らが一度は標榜した「形而上学」との対決が遂行されている。ニーチェとの対決はそれと時期的に重なっているのである²¹。

しかし、このことはニーチェ解釈という視点から見れば、必ずしも稔り豊かな成果をもたらしたとは言えないであろう。それは単にニーチェに対する肯定的な姿勢が次第に批判的なものへと転換していくというだけではなく、いわゆるプラトンに始まる「形而上学の歴史」の完成者としてニーチェのニヒリズムをそこに当てはめる、いわば、ジグソーパズルの最後のピースのようにニーチェの思想を扱うようになるからである。特にそれが目立つのが本稿の主題であるニヒリズムをめぐるハイデガーの解釈である²²。

だが、ハイデガーのニヒリズム解釈は、彼自身が認めているように、ニーチェのテキストに沿った文献学的な解釈としては問題を残しつつも²³、そこからハイデガーの存在思想が明確に読み取れるのは事実である。また先に基本線を示したニヒリズムをめぐるニーチェとハイデガーとの方向性の違いがここで浮かび上がってくる。

では、具体的にハイデガーはニーチェのニヒリズムをどのように解釈するのであろうか。ここではハイデガーのニーチェ解釈の「帰結」と見なすことができるがゆえに、主に『ニーチェ』第2巻の第6講「ニーチェの形而上学」と第7講「ニヒリズムの存

在史的規定」に基づいて考察を進めることとする。

第6講において、ハイデガーは本稿で取り上げたのと同じニーチェの断片「最高の諸価値が無価値になってしまうこと」としてのニヒリズムを考察の出発点に置き、これを「存在者そのもの全体についての従来の真理の倒壊」であるとする。存在者全体の真理に関わる限り、ニヒリズムはプラトンに始まる西洋形而上学の歴史の中に位置づけられる。それはまた一切の存在者が全体として別様に、つまり、全的に別の諸条件の上に定立されねばならないことをいうのであり、従来の一切の諸価値の価値転換を意味するのである。その点でニヒリズムは解放をもたらす肯定的な面を持っている。

だが、これを「不完全なニヒリズム」のように、超越的で超感性的な価値の在所そのものを保存したまま、そこに新しい理想を据えることは許されない。むしろ、ニヒリズムを完成させるためには、永遠なる真理そのものも存しないことを認識する「極端なニヒリズム」をくぐり抜けなければならない。そうして、あらゆる理想を否定しつつも、「価値評価の原理」である「力への意志」のみを肯定する「脱我的ニヒリズム」に至ることで、ニヒリズムは自らを完成し、「古典的なニヒリズム」となるのである。こうして全ての自体的に存続するものが拒否され、力への意志が創造の根源と尺度として肯定されることによって、ニヒリズムは「一つの神的な思惟法でありうるのかも知れない」とニーチェは述べるのである。

ハイデガーはさらに思索の歩みを進めて、存在者そのものが力への意志であるならば、ニーチェにとって存在者全体はどのように規定されるであろうかと問いかける。この問いに対する回答は「存在者全体はいかなる価値を有するか」という問いに答えることによって得られるのだが、ハイデガーによれば、それがニーチェの永遠回帰の思想の持つ意義となる。

存在者全体はいかなる価値を有するか、という答えに対してニーチェは「生成（つまり存在者全体）はいかなる価値も持たない」と答える。これをハイデガーは次のように解釈する。すなわち、力への意志が設定する目標ないしは諸価値は、自らの外部に位置し、そこへと到達することで力が停止するようなものではない。つまり、「力への意志は自己自身に打ち勝つものとして、実質的に自らのうちへ回帰する」のであり、その際、生成とは同一物の自己還帰となるのである。つまり、存在者全体は「同一物の永遠回帰」によって規定されることとなる。

さらに、ここである種のアイロニカルな事態が生じてくる。それは同一物の永遠回帰というあり方において、生成が〈存在〉として固定化されてしまうということである。つまり、真理はある特定の種類の「誤謬」、つまり、生存のために必要な誤謬に

他ならない。

こうして、力への意志は存在者そのものが何であるか、つまり、その本質を規定するのであり、同一物の永遠回帰は存在者全体がいかにあるのか、つまり、その現実存在を規定している。こうしてニーチェのニヒリズムは形而上学であり、しかも、その完成形なのであるとハイデガーは言う。

ここまでの要約においても、ハイデガーの解釈が先に考察したニーチェ自身の遺稿とは相当に趣の異なるものであることは容易に見て取れるであろう。しかし、もっとも問題を孕んでいるのは、「超人」についてのハイデガーの解釈である。それを次に見ていこう。

ハイデガーによれば超人とはこのような存在者全体のあり方を引き受ける人間であり、理性に代わって「身体」において力への意志を具現化する者である。しかし、この主体の本質はそれによって、「大地の支配のために力の本質を無制約的に権能づけること」²⁴となる。また、それは「物の全面的な機械化(Maschinalisierung)」²⁵とも言いえる。機械化とは文字通り機械によって製作されるものとなることであるが、これはまさに次節で取り上げる「技術の支配」と重なるものである。さらに同書の別の箇所、ハイデガーが「総動員」、「力の拡大への奉仕」、さらに、「地上の一切の権力手段と地球そのものに対する人間の絶対的支配」に発する世界観について語っていることにも相通じている²⁶。さらに、ハイデガーは超人の解釈に託して、ナチズム批判を行ったのだと言うこともできるであろう²⁷。

とはいえ、現代のニヒリズムが技術による人間の大地の支配と結びつくことと、ニーチェの語るニヒリズムとが同一の平面で語られることには、やはり違和感を覚えざるを得ない。そして、両者の違いは、ニーチェにおいてニヒリズムはまさにその第三の「極端なニヒリズム」において徹底的な相対主義の主張となるのに対して、ハイデガーにおいては「古典的ニヒリズム」として力への意志の形而上学をいわば完成させる〈土台〉となっているという点に現れている。もちろん、ニーチェのパーспекティヴィズムが、いわゆる「クレタ島の嘘つき」のパラドックスと同型の自己言及性を持つがゆえに、主張としては成立しえないという批判もできるであろう。しかし、果たしてニーチェはこれを大真面目な主張として述べたのであろうか。むしろ、極端なニヒリズムは、それに強き者＝超人が耐えられる力を持っているかどうか「試される」というところにその意義がある。ここで、真理を「女」に見立てる『善悪の彼岸』の有名な序を引き合いに出すことも許されるであろう²⁸。そこで独断的な哲学としてのプラトニズムがからかいの対象となっているのであるが、ニーチェ自身は女としての真理を獲得するために、誘惑し、試みる必要があるということを知っていた

たと思われる。それゆえ、ニーチェは自らの立場をまた「実験哲学」とも呼ぶのである²⁹。

このような観点から見れば、ニーチェのパーспекティヴィズムは、『ツアラトゥストラ』の「幼子」や「世界一遊戯」(Welt-Spiel)³⁰における芸術的創造＝認識に繋がるものと見なすことができるのであるが、ニーチェをどこまでもプラトン主義の「逆転」(Umkehrung)として理解する限り、そのようなニーチェの思想は解釈から排除されることとなる³¹。結局、ハイデガーは自らの用意した枠組みにニーチェを当てはめることになってしまうのである。形而上学の完成者としてのニーチェについて、ハイデガーは次のように裁定を下す。

ニーチェによる形而上学の完成は、さし当たっては、プラトニズムの逆転である(感性的なものが真の世界になり、超感性的なものが仮象の世界になる)。しかしそれと同時に、プラトンの「イデア」が、しかも、その近世的形態においては、理性原理となり、そしてこの理性原理が「価値」になっているのであるから、プラトニズムの逆転は「すべての価値の転換」になるのである。そこでは、逆転されたプラトニズムは、盲目的に硬直化し平板化される。いまや、自分自身のために自分へ向かって自分自身を力づける「生」という唯一の平面だけが、わずかに存立するのみになる。形而上学は存在性をイデアとする解釈から明確に始まるかぎり、それは「すべての価値の転換」においてその極限的な終末に到来するのである。この唯一の平面こそ、「真」の世界と「仮象」の世界との廃棄の後にも残存するものであり、これが永遠回帰と力への意志との同一なるものとして現われ出るのである³²。

このように、ハイデガーのニーチェ解釈は、ニーチェの思想をハイデガー自身の形而上学の歴史という枠組みに当てはめるために相当問題を孕んだものとなっている。さらに、ニーチェの思想にはニヒリズムを越え出ていく思想があるにもかかわらず、ハイデガーは資料の上での制約もあったにせよ、それを無視してしまっている。

しかし、その一方で、ニヒリズムはニーチェの言うように〈生〉にとっての価値の喪失にとどまるのかどうか、つまり、人間とその文化の危機にとどまるのかどうかについては改めて問われなければならない。むしろ、ハイデガーが言うように、世界そのものの荒廃、存在者の全体が〈無〉になることこそが、ニヒリズムの「本質」ではないのかと問うこともできるだろう。地球そのものの支配に乗り出すのが「超人」であるというハイデガーのニーチェ解釈には大きな問題があるとは言え、ニヒリズムの

問題が存在ないし存在者全体に関わる問題であるという洞察において、ハイデガーのニヒリズム理解は大きな意義を持つと考えられるのである。

次にハイデガー自身のニヒリズムをめぐる思想の展開とそこに現れる問題について考察を進めることとする。

2. ニヒリズムとしての形而上学とニヒリズムの完了としての技術支配

2.1 形而上学の歴史と存在の「外留」(Ausbleiben)

ハイデガーによれば、「ニヒリズムの本質は無への問いが真剣に問われていないことに存する」³³。そして、西洋形而上学の歴史は、まさにこの点でニヒリズムであるとされる。ハイデガーの主張を簡単にまとめるならば、以下になるであろう。

形而上学は、存在者そのものとは何かを問うことによって、存在者の〈本質〉や、〈根拠〉あるいは〈原理〉を問題にしてきた。ハイデガーによれば、これらは結局、存在者の〈存在〉の規定である。例えば、プラトンのイデア、アリストテレスのエネルゲイアに始まり、ヘーゲルの絶対概念、ニーチェの力への意志に到るまで、それぞれの哲学者の根本概念は、全て存在者の存在を規定するものなのである。しかし、これらの根本概念は、必ずしも存在者の存在として明確な仕方で問題にされている訳ではない。むしろ、中世哲学における〈最高原因〉としての神の概念に端的に現れているように、存在者の本質、根拠、原理といったものは、それ自身やはり存在者であると言わざるを得ない。つまり、世界全体の根拠が、神、主体、価値といった仕方で捉えられることによって、存在者の現れとそもそも可能にしているはずの〈存在〉の平けがそれとともに隠れてしまう、つまり、無となってしまうのである。この事態をまたハイデガーはニヒリズムと呼ぶ。西洋の形而上学自体が存在を問わないがために、ニヒリズムに陥ることになるのである。

形而上学は確かに存在者の存在を問題にしながらも、それを「一つの存在者に置き換えてしまう」(GA6-2, S.312)。それ故、形而上学が存在者全体を超越して、存在が問われるべき次元へと到るのは、「ただ、存在者そのものを表一象する(vor-stellen)ため、即ち存在者に帰還するためである。そして、このような超越においては「存在は表象的にいわば軽く触れられているに過ぎない」(GA6-2, S.315)。つまり、存在は存在者そのものについて問うことの内でのみ問題にされ、しかもその実、本当には問題にされないままなのである。

だが、このような存在忘却は、やはり思惟の怠慢に由来するのではない。ハイデガーにとって、形而上学の歴史において、存在忘却がそれと気づかれないうままでいることは、決して仮初めのことではなく、ある必然性を持っている。形而上学の欠陥の故

に、存在を把握することができないのではなく、むしろ、その逆に、「存在は、自らを存在者の内へと顕すことによって、逃れ去っている」(GA5, S.337)のである。しかし、存在など初めから無いということではない。それは存在の隠れであり、そのようにして隠れることが可能になるためには、存在は何らかの仕方で現れているのでなければならない。こうして、存在は存在者そのものの規定の内、本質、根拠などという、いわば〈仮の姿〉に身を隠しながら現れている。換言すれば、存在の迷わしが、上に述べたような形而上学の根本概念の変遷を可能にする歴史的な〈場〉ないしは「在処」(Ort)を開くのである。ハイデガーは、即ち、形而上学の存在者の規定は、各々の時代に生きる人間の存在者との関わりを、全体として規制する枠組みとなっているのであり、人間はその下でそれとは知らずして「執一存」(In-sistenz)の内に入り込んでしまっているのである。しかも、この迷わしの場、つまり、「迷域」(Irrtum)の内で形而上学は、自らの存在忘却という〈本質〉に気づくことなく変遷する。このことは存在の現れの側から言えば「存在の歴史のエポック(Epoche)」(GA5, S.265)ないしは「留まり」(Bleibe)である。しかし、そのようなエポックにおいて、存在は「姿を現さない」(ausbleiben)、つまり形而上学の歴史の外側に留まっている。だが、それは形而上学の歴史の外側に、存在の歴史が並立しているにも関わらず、形而上学はそれに気がつかないということではない。むしろ形而上学の歴史は、存在が自らを顕にしないという仕方で自らを「贈る」(schicken)存在の歴史であり、それをハイデガーは、歴史的運命、即ち「歴運」(Geschick)と呼ぶ。そしてあるエポックから次のエポックへと「世界歴史」は、急激な仕方で移り行くのである。それ故、「形而上学の本質は、それが存在者そのものの真理の歴史として、存在自身の歴運から起こっていることとなろう。形而上学はその本質において、存在自身の、留保されているが故に考えられていない秘密となるだろう」(ebd.)。

さて、このような上空俯瞰的な議論は、すでにニーチェ解釈において確認したように、個々の哲学者の学説に対する忠実な態度とは相容れないものがあるが、存在が姿を現さないことと、ニーチェにおいてニヒリズムが大きな課題になったこととは注目すべき連関が認められるであろう。すでにニーチェが看破したように、プラトニズム自体がニヒリズムなのであるが、ニヒリズムの教説としての主張(とハイデガーが理解する)が今度は形而上学の完成となる、そういう時代にまで存在の歴史は進んだということである。ハイデガーが形而上学の全体を見渡すような立場に立つことができるのも、ニヒリズムの進行ないしは深刻化によって、自らの時代の危機が極まっているために他ならない。

このような時代においては形而上学としての哲学はもはや終焉を迎えたとハイデ

ガーは診断を下す。では、哲学に代わって時代を支配するのは何か。この問いに答える前に、ニヒリズムに対するハイデガーの態度について明らかにしておく。

2.1 「存在の問いへ」におけるユンガーとハイデガー

ニヒリズムに対してハイデガーはどのような態度を示しているであろうか。ニーチェもそうであったように、ニヒリズムは克服されねばならないと言うであろうか。エルンスト・ユンガーの60歳記念論文「存在の問いへ」(1955)には、ニーチェの影響を強く受けたユンガーとハイデガーのニヒリズムに対する思索の相違が明確に現れている。これに依拠してニヒリズムの超克とは別の道をハイデガーが辿ったことを示しておく。

ユンガーに特徴的であるのは、ニヒリズムに対する「臨床的な」態度、「記述的」な態度である。ニヒリズムは外的な因子から生じた疾病ではない。むしろ、それは「発癌因子」にたとえられるものであり、第一次世界大戦において成立した「総動員(totale Mobilmachung)体制」において、ニヒリズムは完成に至ったとユンガーは診断を下す。しかし、ユンガーはこの総動員から逃げるのではなく、むしろ、「労働者」として総力戦を戦い抜く戦士となることを決断するのである。ここには「能動的ニヒリズム」(ニーチェ)に対する共感が見て取れる³⁴。生の意味が欠けているのならば、それを徹底的に生き抜くことによって、その意味の欠如、つまり、ニヒリズムを克服しようというのがユンガーの立場である。

これに対して、ハイデガーにとって課題となるのは、ニヒリズムの〈本質〉に関する思惟であり、ニヒリズムの「所在究明」(Erörterung)である。ニヒリズムという零子午線としてのニヒリズムの克服、つまり、『線を越えて(Über die Linie)』を目標とする(ユンガー)のではなく、「線について(über)」思索をめぐらすことの方がより重要であるとハイデガーは主張する。

とはいえ、現代において、ニヒリズムの完了が実現しているという認識においては、ユンガーとハイデガーは一致している。さらに、ハイデガーはニーチェの言う「通常の状態」としてのニヒリズムが現代を特徴づけるとする(GA9, S.392)。しかし、このことはニヒリズムの克服のチャンスが到来したというよりも、今後長きにわたるニヒリズムの支配が続くことを示唆しているのである。

このニヒリズムの支配する時代においては、存在が人間に向かってくるあり方も、ある両義性において捉えられなければならない。これを示すのが、存在とそれにつけられた十字交叉であり、これは一方では、抹消記号として機能しながら、他方では、「方域」(Geviert)、つまり、「天空」—「大地」、そしてこれに対応する「神々」—「死

すべき者」の取り集めと現前が、同時に、存在が隠れることでもあるという事態を示すものなのである (Vgl. GA9, S.411f.)。

ニヒリズムの「堪え忍び」(Verwindung)を徹底することのなかで、「無の本質」が到来し、死すべき者の許に宿るといえば〈僥倖〉があって、ニヒリズムの克服に結果として至る (Vgl. GA9, S.410)。これがニヒリズムに対するハイデガーの基本的な態度なのである。

2.2 ニヒリズムの極致としてのゲシュテル

では、ハイデガーは現代のどのような〈動向〉にニヒリズムを見出しているのだろうか。すでに、ニーチェの超人解釈においてその一端が示されていたが、ハイデガーは世界（ないしは地球＝大地）が科学技術によって徹底的に支配されていることにニヒリズムの極みを見出す。そして、この技術の〈本質〉を「ゲシュテル」(Ge-Stell)と名づけている³⁵。

技術とは本来、「ポイエーシス」(芸術的制作)と同様に、存在の真理を具体化する、つまり、「こちらへともたらず働き」(Her-vor-bringen)である。しかし、近代技術を統べているのは、ポイエーシスとは大きく異なり、自然や人間に対して、〈資源〉や〈エネルギー〉や〈労働〉を供出するようにそそのかす「挑発すること」(Herausforderung)である。このような挑発ないしは「徴用すること」(Bestellen)によって、「今や、国土は炭鉱地帯となり、大地は鉱床地帯となる」(GA79, S.26)。ハイデガーは「ブレーメン講演」(1949)のこれに続く箇所において、次のように述べている。

大気は窒素に向けて、大地は石炭と鉱物に向けて、それぞれかり立てられ、さらに、鉱物はウランに向けて、ウランは原子力に向けて、原子力は徴用可能な破壊活動に向けて、というふうに、次々かり立てられる。いまや農業は、機械化された食料産業となっており、その本質においては、ガス室や絶滅収容所における死体の製造と同じものであり、国の封鎖や兵糧攻めと同じものであり、水素爆弾の製造と同じものなのである³⁶。

ここで一つ注意すべきは、一つの徴用はさらに次の徴用へと至ることで、連鎖的な「円環運動」を形成しているという点である。大量生産・大量消費社会において、生産・消費がお互いを要求するというあり方、資本主義における資本の際限のない自己増殖、覇権のための覇権を求める帝国主義、等、現代社会の宿痾ともいべき自己目

的的な動向と徴用の円環的連鎖は連動していると考えることができる。円環運動に特徴的なことは、「何のために」という〈目的〉が欠如していることである。そこには常に過程のみが存在するのであり、ハイデガーがニーチェの「力への意志」を解釈して言うところの「意志への意志」と同じ構造が見て取れる。存在者は自らの根を奪われて代替可能なものとして漂っているのである。

それゆえ、近代技術の支配する世界においては、人間もまた徴用され、召集 (Gestellung) されたものとなる。先に述べたように、ユンガーの言う「総動員」における「労働者」というあり方が技術の支配する世界にふさわしい人間像となるのである。

自然と人間は徴用されることで、次の徴用のために用意されたもの、つまり、在庫・ストックとしての「用象」(Bestand)となる。これは、「人材 (=人間的資材)」や「リソース」という言葉が暗示しているものとほぼ重なるということができるであろう。ゲシュテルとは、こうして、徴用することのヴァリエーションとしての hinstellen (配置する), zustellen (呼び立てる), gestellen (出頭させる・調達する) などの「立てる」働きの〈集約態〉ないしは〈メカニズム〉として、現代の技術的世界の全体を動かす根本動向を指し示すものなのである。自然も人間も自らの固有性を失い〈無〉となっているという点で、まさに、これはニヒリズムの究極のあり方であると見なすことができるであろう。

ただし、ここで次の2つのことを付け加えておかなければならない。

第一に、ゲシュテルにおける技術=徴用の支配は、同時に、近代的な主観性の「完成」でもあるという逆説的な事態である。人間は単にゲシュテルの「部品」となるだけではなく、ゲシュテルというメカニズムにおける歯車の回転をより速める役割を果たすこともある。原子爆弾製造に関わったアメリカの科学者の行動はまさにそれであった。資本主義における資本の自己増殖の運動も、会社組織とそれを「経営」する人間なしにはありえない。究極の〈何のために〉という問題意識をもたないまま、研究や経営へ没頭することで、人間は自らの主体性を喪失するであろうが、ゲシュテルの支配をより一層前進させるという点で、まさに成果を上げるのであり、それによって主体性の発揮と錯覚されることにもなる。

第二に、ゲシュテルに徴用される〈主体〉は、より典型的には、国家、会社法人、産業社会といったあり方をとるということである。1930年代後半のハイデガーのテキストでは、技術はつねに現代国家の総動員体制、ナショナリズムとの関係において捉えられており、その意味でハイデガーの技術論は「政治的」である³⁷。『省察』(1938/39)の「63. 技術」では、次のように述べられている。

人間存在の主体性は、諸国家(Nationen)という姿において最も純粋に具体化される。国家の共同体(Gemeinschaft einer Nation)は、人間の主体への単独化を極限にまで推し進める。存在者の存在が、対象のないし状態的なものの被表象性と被制作性(Vor- und Hergestelltheit des Gegen- und Zuständlichen)に基づいて理解されるところで、はじめて技術が支配する³⁸。

人間が一個人として、近代技術におけるゲシュテルの動向にどう応じるかということであれば、事態は比較的単純であるとも言えるが、ゲシュテルに応答するものが〈組織〉としての〈主体〉であるとすれば、組織の中で用象となった人間がこれに対決することは極めて困難である。とはいえ、哲学はたとえ無力であってもゲシュテルに対して対峙しなければならないであろう。ハイデガーはこの問題にどう応じるのであろうか。

2.3 技術支配とニヒリズムの克服の問題

近代技術の世界支配が〈危険〉を孕むものであることは、現代の人間にとっては、もはや自明の事柄に属するとも言えよう。そして、このような危険を実感している者の目からすれば、「ブレーメン講演」や「放下」講演(1955)におけるハイデガーの主張は、直ちに受け入れられるものではないように見える。

ハイデガーによれば、現実に地球が滅亡することや、何十万の人間が収容所で死んでいくことは、それ自体は技術の危険の〈本質〉ではない(GA79, S.56)。同様にして、原子力時代の到来において、第三次世界大戦が勃発し、人類の全くの壊滅と地球の破壊が帰結するかも知れないということよりも、その危険が取り除かれた時に、一つのはるかに大きな危険が原子時代において脅かしつつ迫ってくる、と主張する(GA16, S.528)。ここでハイデガーがはるかに大きな危険であると言うのは、危険が危険としておのれの正体を隠蔽していることであり、畢竟、人間の思惟がこの正体を十分に思惟することなく、知らず知らずのうちに計算的・算定的な思考だけが唯一の思惟として通用することによって、人間の思惟の〈本質〉である「追思すること」(Nachdenken)が失われることである(ibd.)。

ここでのハイデガーの主張自体は、すでにユンガーとの比較において考察されたものと同じである。つまり、ニヒリズムの〈本質〉や技術の支配の〈本質〉を熟慮することの方が、実践的な応答より重要であるというものである。にもかかわらず、技術の支配を巡るハイデガーの思惟が抵抗感を与えるとすれば、それは、ニヒリズムは世界の〈意味〉における〈無〉であるのに対して、技術の支配がもたらすかも知れない

世界の滅亡は、(自己矛盾的な表現となるが) リアルな〈無〉であるからであろう。それゆえ、人は、人類と地球が減んでもなお、存在の思惟は意味を持つのか? とハイデガーに反問するのであり、ハイデガーのこのような言説は、人類を実際に救うことに役立たないがゆえに、無責任であると裁定を下すのである³⁹。

また、この点でハイデガーと意見の一致を見ることができなければ、次のようなハイデガーの主張もある意味で空虚なお題目のように見えるかもしれない。これについては後でもう一度考えることとして、まずその主張を確認しておこう。

「ブレーメン講演」の中でハイデガーは次のように述べる。ゲシュテルは人間の仕業ではない、存在の真理、ないし、空け開けの次元に属する。それゆえ、ゲシュテルを人間が自らの力で乗り越えることはできない。近代技術の大地の支配は、まさに時代の「命運」(Geschick)なのであり、人間にできることは、技術の〈本質〉を熟考することによって、ゲシュテルに対して開かれた場所を確保することにすぎない。とはいえ、ヘルダーリンの言うように「危険のあるところ、救いとなるものもまた育つ」のであり、人間に許されているのは、ゲシュテルの只中における「転回」、つまり、存在の棄却と世界の拒絶から、存在の守護と世界の世開(welten)へと転回する時代の閃きを待つことなのである、とハイデガーはやや秘教的な物言い述べている。

一般聴衆を前に語られた「放下」講演においては、ハイデガーは、それよりは平明な言い方で、技術的世界に対して同時に「然り」と「否」を言う態度を提唱し、この態度を物への関わりの内における「放下」(Gelassenheit)と呼ぶ。放下においては、技術的な対象の避けがたい使用に対しては「然り」を言い、それが我々を独占し、人間の本質を歪め、混乱させ、荒廃させる場合には「否」を言うことができる、とハイデガーは言う(GA16, S.527ff.)。また、この放下によって、人間は技術的世界の「秘密」(Geheimnis)に対して開かれることも可能になる(ibd.)。つまり、ゲシュテルが存在の命運であるという秘密である。この「秘密」について、ハイデガーは『四つのゼミナール』で示唆的な発言をしている。「ゲシュテルは、いわば性起(Ereignis)のネガフィルム(photographische Negativ)である」⁴⁰(GA16, S.366)。こうして、放下と秘密への開けによって、人間は失われた「土着性」を新たに取戻す道へと到ることになる。

さて、ここで先ほどのハイデガーに対する論難について我々の回答を出すことにする。つまり、第三次世界大戦によって人類と地球が減んでもなお、存在の思惟は意味を持つのか? という問題である。これに対して我々は「然り」とも「否」とも言う。まず、否であるが、存在の思惟は、思惟する存在者の存在を前提とする以上、この疑問の正当性を否定することはできないであろう。だが、然りということができる

のは、仮に技術支配によって人類と地球が減ぶことを阻止する代償として、人間本来の思惟のあり方（つまり、存在をめぐる思索と詩作）が完全に失われるとするならば、人類の存続には意味がないと応酬することが可能だからである。

人は、思索と詩作が不可能になるというこの危険が現実化することを真剣に受け止めないがゆえに、いわば、「命あつての物種」という格言通りに、ハイデガーの主張に反発するとも言える。しかし、科学技術の支配が進行することによって、人間や生命の完全な機械化が実現するという情景は、今やSFではお馴染みのものではあろう。さらに、第三次世界大戦はさておくとしても、農薬や化学肥料の大量使用に見られるような農業の産業化、資本主義のグローバルな展開、温暖化を代表とする地球環境問題（ハイデガーは与り知らぬことであろうが）等といった、現代における科学技術の支配と密接に関わる問題に対しても、同じことが言えるであろう。すなわち、技術の問題は技術的にしか解決できないということは事実であるにしても、技術的解決が実現すればそれでよいということにはならない。技術的解決がもたらした世界が、人間に（限らないであろうが）とって全く無意味なものになる危険性を考慮しなければならないのである。

ただ、ハイデガーの主張に対して次の一点は批判すべきではあろう。すなわち、ハイデガーが危険という言葉で、人類絶滅と存在の思惟の喪失の両方に用いて、後者が「より危険である」と言っている点である。確かにこのどちらも危険であることは間違いないであろうが、この二つは果たして比較級によって比べられるような事態なのだろうか。むしろ、両者の危険はそれぞれ独自の意味をもっており、同一平面において比較すべき事柄ではないと言うべきではないか。さらに言えば、ここには両者を上から見下ろすような超越的な視点が忍び込んではいないであろうか。つまり、形而上学の歴史を語る際のハイデガーの語り口と同種の姿勢がここには見出されるのであり、少なくともそれによって、ハイデガーの主張が説得力を弱めることになることは否定できないのである。

さて、今述べたような難点があるにしても、我々は、ニヒリズムの極致としてのゲシュテルという問題に直面することで、自らが抜き差しならない状況に置かれていることを見出すのは事実である。その際、ハイデガーのゲシュテルの危険に関する主張、さらに、放下や存在の思惟にまわりつく秘教的な言辞を拒絶するにせよ、それを受け入れるにせよ、ニヒリズムとその本質についての深い思惟が求められているというハイデガーの主張に対しては、虚心にこれを受け入れるべきではないかと思われる。我々がさしあたって言えるのはここまでである。それを越えた議論を進めるためには、〈ネガ〉としてのゲシュテルの支配と〈ポジ〉としての存在の守護と世界の開けとの

連関の究明が必要となってくるのだが、これについては稿を改めて論じる他はない。

結語に代えて

本論文における分析・考察の結果、次のことが明らかとなった。まず、ニーチェ思想において、ニヒリズムは多面的な性格を示しているが、特にパースペクティヴィズムとの連関においてニヒリズムの問題は芸術や真理の問題と繋がっており、ここにニーチェ思想の意義を見出すことができることである。ところが、ハイデガーはニーチェとの対決を通じて、当初示していたニーチェに対する好意的な姿勢を転換し、その存在史的な解釈においては、ニーチェのニヒリズムを西洋形而上学の完成としていわばあらかじめ用意した枠に埋めてしまう。ハイデガーにおいては、ニヒリズムの現象は、形而上学の歴史の全体において〈存在〉が逃れてしまうということとして捉えられており、形而上学の本質そのものがニヒリズムであると考えられている。この主張自体は特に無と存在との深い連関をめぐるハイデガーの思惟と共に大いに注目に値する。そして、ハイデガーによれば、ニヒリズムの今日的な現象は科学技術の世界支配であり、ハイデガーはニヒリズムを耐え抜くことの必要性を説くが、反面、この技術支配の〈危険〉についてのハイデガーの教説には少なからぬ問題があった。

ニヒリズムの背後には〈無〉の問題が存している。それは多様な仕方で見えてくる。例えば、生の意味の喪失であったり、存在から目を逸らした根拠への問いであったり、世界の無目的・盲目的な利用であったり、あるいは、人類と世界の絶滅の可能性であったりする。ニヒリズムの本質を見抜くためには〈無〉に対する透徹した視線が必要であろう。ニーチェもハイデガーもその点で卓越した目を持っていたということは疑う余地がないと思われる。

注

『ハイデガー全集』(M. Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1975-)からの引用は、GA という略号の後に巻数、さらにカンマで区切ってページ数を記す。

『ニーチェ全集』(F. Nietzsche, *Sämtliche Werke: Kritische Studienausgabe*. Hrsg. von G. Colli und M. Montinari. München, Berlin/New York, 1980.)からの引用は、著作については、以下の略号を用いた上で、論文番号をローマ数字で、節番号をアラビア数字で示す。

FW: Die fröhliche Wissenschaft. KSA, Bd.3, S.343-651.

JGB: Jenseits von Gut und Böse. KSA, Bd.5, S.9-243.

GM: Zur Genealogie der Moral. KSA, Bd.5, S.245-412.

遺稿については、執筆時期、ノート番号と断片番号(あるものは節番号)を示す。

¹ 本稿は第 35 回日本現象学会(2013/11/10(日)於・名古屋大学)でのワークショップでの発表を元に、大幅な加筆訂正を行ったものである。

² GM, Vorrede 5

³ Herbst 1887, 9[35] 1 ニヒリズムの両義性(能動的ニヒリズムと受動的ニヒリズム)を論じている有名な遺稿の最初のところにこの表現が現れる(ニヒリズムの二つの様態については後で論じる)。ニーチェ自身のニヒリズムの捉え方には、時代による変遷、その含意するところによりかなりの幅があることには注意を要する。

⁴ November 1887-März 1888, 11[411]

⁵ フィヒテのイエナ大学追放の時に巻き起こった 1799 年の「無神論論争」において、ヤコービが、フィヒテの自我の立場を「ニヒリズム」(Nihilismus)と呼んだのが、ドイツ語での最初の使用例であるとされるが、フィヒテもヤコービに同じニヒリズムというレッテルを返している。

⁶ 『父と子』の主人公バザーロフは、あらゆる権威に反対する科学的な合理主義に立つことで、ギリシア正教やツァーリズムに対して反発する。ただし、彼自身がニヒリストを自称するのではなく、友人のアルカージョー・キルサーノフとその伯父であるパーヴェル・キルサーノフによってそう呼ばれるのである。ちなみに、ニーチェの「能動的ニヒリズム」も、このロシア・ニヒリストのことを念頭に置いたものであった。川原(1977)、118 頁以下を参照。

⁷ Herbst 1887, 9[35] 1

⁸ GA9, S.312

⁹ Ereignis(性起)と Enteignis(脱性起)、Zuwendung(向かっていくこと)と Entzug(抜け去ること)の共属、存在と存在者の二重嬖(Zweifalt)、Ereignis と Ge-Stell の連関。

¹⁰ ニーチェの規定は、次の通り。「価値という観点からは、生成の内部で比較的持続する生の複合的な形成体についての維持・昂揚させる条件に関する観点である」。(November 1887-März,

1888, 11[73])

¹¹ Herbst 1887, 9[38]

¹² FW, V 374

¹³ *ibid.*

¹⁴ 「世界はおのれの背後にいかなる意味も隠しておらず、むしろ、無数の意味を持っているのである——「パースペクティヴィズム」(Ende 1886-Frühjahr 1887, 7[60])。

¹⁵ Sommer1886-Herbst1887, 5[71]

¹⁶ 『道徳の系譜』において、奴隷（僧侶）道徳と呼ばれる。

¹⁷ ニーチェがここでツァー暗殺による社会転覆を企てたロシア・ニヒリストのことを念頭に置いていることは間違いないだろう。彼らは「相当程度の精神文化」、また、「相対的裕福さ」を持ちながら、社会に対して反旗を翻した。

¹⁸ ニーチェは『道徳の系譜』の中で、パースペクティヴ的な認識について、次のように述べている。「われわれがある事柄についてますます多くの情動を発言させ、ますます多くの眼、さまざまに異なる眼を同じ事柄に向けるすべを心得ているならば、この事柄についてのわれわれの「概念」、われわれの「客観性」はいっそう完全なものになるだろう」(GM, III 12)。また、視点の複数ということ言えば、ニーチェがレンツァーハイデ草稿の中で、スピノザの汎神論を永遠回帰の正反対の立場とみていることも興味深い。「全てが完全で、神的で、永遠である」ということは〔自身の回帰思想と同様に〕同様に“永遠回帰”への信仰を強制する」(Sommer1886-Herbst1887, 5[71] 7)。つまり、スピノザの汎神論は、ニーチェ自身のニヒリズムと正反対の〈視点〉であるが、まさにそれゆえに「永遠回帰」を証明する一つ「眼」となるのである。

¹⁹ Herbst 1887, 9[35]

²⁰ November 1887-März 1888, 11[411] 3

²¹ ちなみに、ハイデガー後期思想の礎となる『哲学への寄与』が書かれたのが1936-38年である。

²² とはいえ、そこにはハイデガーに対する同情の余地がないわけではない。というのは、まさにニーチェがニヒリズムについての思索を深めていった時期の思想は、著作ではなく、全て遺稿として残され、さらにそれを周知のように弟子のガストと妹のエリーザベトが悪名高き『力への意志』として編纂しているからである。

ハイデガーは、後にシュレヒタ版として出版された批判的全集版の編集委員を一時期務めており、ガストとエリーザベトの編集に問題があることを知りつつも、ニヒリズムを論じるにあたってはこの「著作」を利用せざるを得なかったのである。この間の事情については渡辺(2010)の328頁以下を参照。

²³ 前項で引用した Sommer1886-Herbst1887, 5[71]の遺稿は、クレーナー版『力への意志』では、§ 4, 5, 114, 55の4つに区分され、Herbst 1887, 9[35]の遺稿はクレーナー版では§23, 2, 22, 13の4つに区分され、文言もいくらか変更されている。ここから、ニヒリズムを受動的ニヒリズムと能動的ニヒリズムの2つに区分し、後者をニーチェの立場とみなす解釈が生じてくる。

24 GA6-2, S.277

25 *ibid.*

26 *id.*, S.14

27 1966年の『シュペーゲル』誌によるインタビューの中で、ハイデガー自身もそのように述べている (vgl. GA16, S.664)。

28 JGB, Vorrede

29 ニーチェの「実験哲学」については、竹内(2010)を参照。そこで挙げられている最晩年の遺稿は示唆に富む。「私が身をもって生きているような実験哲学は、試みとして原則的なニヒリズムの可能性を先取りする。(略)それはディオニュソス的な世界肯定への到達を欲する。(略)それを表す私の公式が運命愛である」(Frühjahr-Sommer 1888 16[31])。また、パースペクティヴィズムの「自己言及性」については、岡村(2005)を参照。

30 ハイデガーは『ニーチェ』の第7講において、「ゲーテに寄せて」というニーチェの戯れ歌(『ファウスト』第二部の結部のパロディ)を引用した上で、この世界—遊戯について論じている。しかし、そこでも「力への意志と同一物永遠回帰の一体性への顧慮なしには、この概念も空虚である」という主張を展開するに留まっており、この歌の主役である「道化」や「愚かなるもの」への言及はなされない。Vgl. GA6-2, S.345f.

31 ハイデガーのニーチェ講義のうち第一の「芸術としての力への意志」においては、ニーチェにより好意的である。そこでハイデガーは、プラトニズムの「逆転」(Umdrehung)が、芸術と真理の関連というニーチェにとっての「難問」へと導き、それがさらにプラトニズムの「脱却」(Herausdrehung)へと至った時に、ニーチェは狂気に陥ったと述べている (GA6-1, S.212f.)。さらに、その端緒は『偶像の黄昏』のニーチェ自身が残した草稿(「いかにして「真なる世界」はついに作り話となったか)からは読みとれるものの、著作となって残された『力への意志』から読みとれることは極めて困難だと、一種の釈明ともとれる発言をしている (vgl. *id.*, S.204f.)。ハイデガーのニーチェ解釈の変遷については稿を改めて取り上げる必要がある。

32 GA6-2, S.15f.

33 *id.*, S.43f.

34 ユンガーもハイデガーと同様に、ニーチェの「能動的ニヒリズム」を誤解している。

35 Ge-Stell には、「集—立」、「組み立て」、「総かり立て体制」などの訳語が提案されており、それぞれに特長があるが、ここでは仮に「ゲシュテル」と音訳しておく。

36 GA79, S.27 生前公刊された「技術への問い」においては、ガス室や絶滅収容所の下りが省かれ、いわゆる原子力の平和利用にも触れられている (*Vorträge und Aufsätze*, 4 Aufl., S.18f.)。

また、ここには刺激的な文言が並んでいるが、ハイデガー自身は事態を冷徹に見すえていると思われる。徴用して立てる働きの連鎖の中では、究極の目的は見失われる。絶滅収容所や水素爆弾の製造においては、破壊のための破壊、絶滅のための絶滅という狂気の沙汰が、科学的で冷静な計算に基づく「処理過程」として行われたことも事実である。とはいえ、それが食料産業としての現代農業と変わらないという主張は反発を招くであろう。例えば、ラクー＝ラバルト(1992)はハイデガーを次のように、攻撃している(翻訳 68 ページ以下を参照)。すなわち、

戦略的に何の意味もないのに殺戮のための殺戮として実行されたユダヤ人のホロコーストと他の事例とは一線を画するというのである。しかし、この主張は直ちには受け入れがたい。先に挙げた理由以外にも、原子爆弾の製造は、ナチスに先を越されないという当初の目的が見失われて、核分裂の連鎖反応を人工的に引き起こすという巨大プロジェクトの達成自体が目的化していったという歴史的事実がある。また、現代農業においては、農薬や化学肥料を大量に使い、需要を無視しても農産物を大量に生産するという点で、生産のための生産という側面を持っている。

37 轟孝夫(2003)p.70 さらに、轟の論文には「補遺」としてハイデガーの技術論のアンソロジーが付けられており、大変有益である。次の引用箇所も轟のアンソロジーを参照した。なお、公刊された技術論において、国家や政治への言及が乏しいのは、まさにハイデガー自身の政治的な自己防衛と考えてよいのではないかと思われる。

38 GA66, S.174 強調は原著者。

39 ハイデガーの立場を存在論的な「原理主義」とすれば、実践的な立場をこれに対置させることもできる。例えば、ヨナスのように、倫理的なアプローチをとって、世界に人類が存続することを、未来倫理的な「定言命法」とするような立場である。

40 さらに、「完全な存在忘却、完全な存在の隠れ」が支配することは、かえって、「存在が人間を必要としている」ことを浮かび上がらせる(GA16, S.370)とハイデガーは述べている。

参考文献

Wolfgang Müller-Lauter (2000), *Nietzsche-Interpretationen. Bd.3/Heidegger und Nietzsche*,

Berlin [u.a.]: de Gruyter

川原栄峰 (1997) 『ニヒリズム』、講談社

渡辺二郎 (2010) 『渡辺二郎著作集第6巻 ニーチェと実存思想』、筑摩書房

氣多雅子 (1999) 『ニヒリズムの思索』、創文社

ラクー＝ラバルト ((浅利・大谷訳) (1992) 『政治という虚構』、藤原書店

轟孝夫 (2003) 「3、技術と国家」、加藤尚武編『ハイデガーの技術論』、理想社、pp.59-143

竹内綱史 (2010) 「ニーチェの実験哲学」、『理想』No.684、理想社、pp.61-74

岡本俊史 (2005) 「パースペクティヴィズムは自己論駁的か? ——ニーチェにおける「真理」と「解釈」」、日本ショーペンハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』別巻第一号、pp.24-42

Summary

Die Abhandlung zielt auf die Bestimmung des Nihilismus in Heideggers Seinsdenken, und behandelt folgende Themen: (1)Heideggers Auseinandersetzung mit Nietzsches Nihilismus, (2)Nihilismus in Heideggers Interpretation von Metaphysikgeschichte. Es wurde gezeigt, dass Heideggers Auseinandersetzung mit Nietzsche bleibt auf Aspekte beschränkt, die für seine Konstruktion von Metaphysikgeschichte ergiebig sind, und dass das Wesen des Nihilismus als Metaphysik in Vorherrschaft der moderne Technik als »Gestell« besteht, aber die Verwindung der Nihilismus gerät in ein grosses Dilemma.